

## 国際コミュニケーション学部の四半世紀

淑徳大学教授

淑徳大学国際コミュニケーション学部長 星野英樹

1965年に設置された淑徳大学が盛大に50周年を祝うと同時に、1995年に認可された国際コミュニケーション学部も20周年を迎えたが、いよいよ最後の卒業生をおくりだす時期が近づいてきた。「コミュニケーション」を学部冠する日本初の学部の栄誉は他大学に譲るとしても、「国際コミュニケーション学部」という時代を先取りする学部名とともに産声をあげた埼玉キャンパスの当時を回想してみると、すでに鬼籍に入った同僚教職員の姿とともに様々な想いが懐かしい思い出とともに去来する。

国際コミュニケーション学部の前身は、英語学科と国文学科から構成される短期大学であるが、今にして思えば、「英語学科」という名称自体が短大開設時は斬新なネーミングだった。それ以前は「英文科」が大勢を占め、文学から語学へと急速に姿を変えつつあった時代の趨勢を感じたものであった。当時の短大生に「英文科」の「英文」の意味を聞いてみても、予想外の返答が返ってきたのは今にして思えば微笑ましい思い出である。文学は必ずしも女子学生にとって絶対的教養ではなくなりつつあったのである。そんな中、看板の「コミュニケーション」とは何か、関連部署の教職員は総力を尽くして、高校の進路指導担当や受験生たちに広報し、学部名称認知の素地を築きあげたことは言うまでもない。

現在、「コミュニケーション」を継承するカタカナ学部は「グローバル」に広がりつつあるようである。外国人旅行者の急増や、日本文化の海外への浸透、次期オリンピック開催を見据えれば、うなずける名称である。淑徳大学としては、「コミュニケーション」の名こそ失うものの、こうした新たな息吹を時代の要請として受け入れる基盤は着実に継続されようとしており、その胎動はすでに始まりつつある。

「コミュニケーション」学会、学部の名のもとに成し遂げられたことを継承してゆくためには、現役世代の役割が重要であり、次世代へのバトンを着実に手渡す必要がある。四半世紀後、埼玉キャンパスが50周年を迎える時、一体、どのような学部名称をかかげているのだろうか。名称はどうあろうとも、その時も「コミュニケーション」学会、学部の精神が受け継がれていることを信じてやまない。